



市民安全部 防災対策課

副主査 成瀬 圭

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

電気× 水道△ 炊きだし△

電気は不通のため、太陽と共に寝起きます。派遣途中に発電機・投光器により体育館へ照明を確保しました。滞在初期は水道水も飲料不可で自衛隊の給水または配給物資の飲料水をポリタンクに移し支給しました。食事は基本的に配給物資（パンやおにぎり、カップラーメン等）を分配します。不定期でボランティアの炊き出し隊や自衛隊の炊き出しを受けました。仮設トイレでは、紙は流さず外のゴミ袋に捨てるといったルールが作られていました。



釜小学校避難所



ある日の配給食（昼・夜）一人分

学校再開・入学式準備

任務当初、校舎内は津波の汚泥こそないものの1階は土・砂のため土足とし、階段で内履きに履き替えていました。4月21日が学校再開・入学式のため、校舎内の清掃を実施しました。避難生活のため、机や個人所有物など教室のものは廊下に出されており、新学年となった生徒が自分のものを旧学年教室で受け取れるよう、先生と共に仕分けたり、壊れた備品、残されたゴミの片付けを行い、教室や廊下、階段を清掃しました。片付いた新1年生の教室で真新しい黄色の帽子を机に一つ一つ並べ新入生を迎え受ける準備をしました。



新入生の迎え入れ準備を行いました



校庭で行われた始業式

喜ばれた牛丼

食事が基本的に配給物資のパンやおにぎりのため、温食はカップラーメンしかなく、食事面で厳しい環境にありました。他の避難所が以前全国チェーン店から牛丼の配給を受けたとのことから、事情を話し直接電話依頼を行ったところ、快く支援を受け入れていただき、避難者全員分の配給を受けることができ、避難者へ分配を行いました。

温食及び久しぶりの牛丼に避難者の方々は非常に喜んでいました。



いつもの配給食はパンやおにぎり、カップラーメン

人気キャラクターも応援に



人気キャラクターが応援にきました

避難者を元気づけるため人気キャラクターが、避難所となっている小学校に応援にかけつけてくれました。避難者とふれあい、写真を撮ったりしたことで、子供からご年配の方まで、みな非常に喜び、涙を流す方もいました。

派遣を振り返って

釜小学校到着当初、校舎1階は土足利用、2階以上の階段や廊下も汚れていました。避難者は主に体育館、他に図工室や一部教室での避難生活。飲食料物資は校舎2階の家庭科室での受け渡しといった環境でした。停電という環境からか全体的に薄暗く、校庭は汚泥まみれ、校舎裏の舗装駐車場は汚泥のため舗装も見えず、流されてきた車や駐車していた車が折り重なっていました。生活環境を改善するため、校舎内の清掃を行い、車を移動し駐車場の汚泥かきを行いました。体育館から校舎までの渡り廊下半面にダンボールを敷き、配給食の受け渡し時等、校舎まで室内履きで移動できるようにしました。トイレは体育館横の仮設トイレで、雨の中の用足しは大変であるため、体育館に眠っていたテントを組立て設置し、通路の雨よけを設置しました。

派遣職員間で話し合いこれらの行動を行ってきました。理想としては避難者と一緒になって生活環境を改善するような作業を行えば良かったと思いますが、避難者の精神的な事情等も考えると簡単ではないと思います。被災し、避難所生活を送ることとなった避難者が、生活の為の組織を作り、運営していくことの大変さを実感し、茅ヶ崎市内で同様の事態が生じた時、行政の立場として避難所運営支援や避難者への対応について、今回の経験を少しでも役立てていきたいと思っています。



財務部 契約検査課

副主査 守瀬 暢彦

【派遣先】

石巻市立 万石浦中学校

避難所の実態把握



避難所である体育館の外観

派遣された頃はまだ避難所に何人の避難者がいるのか、それぞれの名前や住所等も分からないままでした。物資を配付するにも、仮設住宅の申込案内を配付するにも避難者の実態を把握しなければ円滑に進みません。そこで過去の入退所記録を基に、避難所のリーダーに協力を願い、避難所の実態把握をしました。

関係機関の情報収集

当時は情報が寸断されていて今後石巻市や宮城県、国はどのような方策で避難者への救済策を実施するのか分からない状況でした。そこで、インターネットもない中で関係する行政機関に問い合わせをし、情報を積極的に収集し、それを分類ごとにもまとめて避難者へ開示しました。

避難者には必要な情報が届くことになり、それを基に新たな避難者のニーズを把握することができました。



1人当たりのスペースは2畳程度

避難者間の利害調整



避難所前の道は毎日冠水

当時、約180人が1つの体育館に避難していました。有無を言わず共同生活を強いられた避難者同士でルールを守らなかったり、他人に迷惑をかけたりするトラブルが頻発していました。そこで、まず守るべきルールを避難所のリーダーと明確にし、ルールを守らない避難者に対しては我々応援職員が先頭に立って問題を解決しました。



避難所敷地内に設置された自衛隊のお風呂



自衛隊撤収後、米軍のシャワーが設置

派遣を振り返って

派遣期間が1週間と短いことから期間中はとにかく全力で仕事をしていました。必要な情報が足りなかったり、国、県、市の連携が不足しているため軋轢が発生したりして、嫌な気持ちになることもありました。避難者のために前向きに自分なりに力を尽くしました。避難者から感謝をされることも多く、やり足りなかったかもしれないという反省もありましたが、充実した気持ちで帰路につきました。

茅ヶ崎市で地震や津波による被害が起きた場合には、今回の経験と反省をふまえて、本当に避難者のためには何をどうすればいいのかということを中心に考えながら、日常業務をこなしていく中で公務員としての実力をつけていきたいと考えています。



市民安全部 防災対策課

課長補佐 寺島 哲

【派遣先】

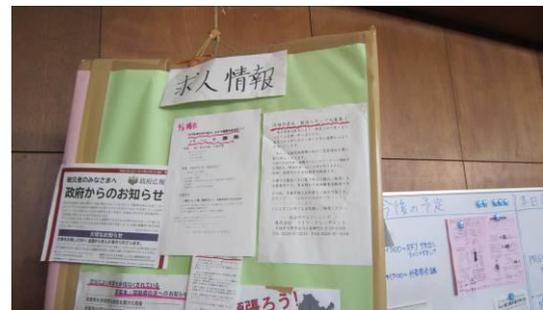
石巻市立 蛇田小学校

避難所の様子

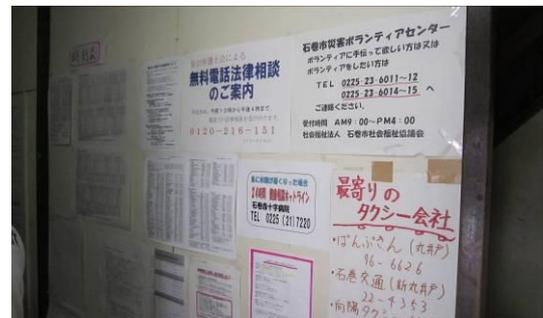
体育館、校舎理科室、谷地集会所、放課後児童クラブに5月1日現在で140人が避難していました。

蛇田小学校の周辺は、震災による倒壊家屋や津波の被害がほとんどない地域であり、避難されている方は、家が全壊もしくは、床上浸水をした方がほとんどで、色々な地区から避難者が集まっていました。児童クラブには5世帯5乳幼児が家族間で相互に連携協力していました。

体育館の掲示板は、みんなの手作りで非常に見やすくできていました。舞台の前には、図書や遊び道具などが置いてありました。体育館の受付には、体育館から家に戻られた方が、毎日来られて受付のお手伝いをしてくれました。また、情報共有の看板をダンボールで作り、回転して見ることができるなどの工夫がされていました。



掲示板



掲示板



体育館の様子



図書館や遊び道具

物資と食事

朝食と昼食はパンとおにぎり、ジュースや牛乳、ソーセージ、お菓子など。夕食は弁当、インスタント味噌汁。当番制で体育館の1班から4班と理科室、児童クラブ、職員分と7つのダンボールにそれぞれ仕分けの作業を行います。私たちが弁当の受け取りこそはしていたものの、各班で当番を決めて、作業に当たっていました。

物資については要望どおり届かないことの方が多く、平等に配ることが困難でした。そこで、代表者会議で話し合い、全体で一括して要望するのではなく、班ごとに曜日を決めて要望することにしました。



5月4日夕食



5月9日夕食



班ごとに仕分け



救援物資は調理室で保管

待望の洗濯機の設置

班長会議を開くと必ず出てくる話として、洗濯機を早く設置して欲しいということでした。学校から許可が出ないということでしたが、コインランドリーは朝行けば昼までかかり、お金もかかります。他の学校でも設置しているところもあったことや、洗濯機を必要としている現在の状況を話して、許可を得て3台設置することができました。

派遣を振り返って

私は阪神淡路大震災の時に、震災から4ヶ月後の5月に兵庫県神戸市長田区の双葉小学校の避難所に1週間派遣された経験があります。避難場所は教室を使用し、学校はすでに再開していて、地域の自治会長を中心に避難所が運営されました。当時はビルが傾いていたことや長田区の火災の範囲の広さに驚きましたが、今回の東日本大震災の津波による被害の甚大さにはテレビでは見ていたものの驚きました。2ヶ月後の5月に派遣されましたが、体育館と教室での避難所生活は各班の代表者を中心に行われていて、阪神淡路大震災の時とは少し違いましたが、どちらも環境は良くなく、非常に厳しい避難生活であることには変わりありませんでした。そんな中でもお互いに気を配り思いやりながらの生活があり、また私たちのことまでも逆に心配してくれて、大変温かい気持ちになったことを覚えています。



市民安全部 防災対策課

主査 廣田 憲昭

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

喪失感の中の避難生活

被災された方々は、住む家をなくし、家族を亡くし、仕事をなくし喪失感のなか避難生活を行っている状況でした。

私が支援活動を行っていた避難所では自治がなりたっておらず、支援に来た我々に全てまかしている状況でした。少しずつ自分たちの事は自分たちでやっていただくよう話し合いを行い、役割分担をしめし行動していただくよう促し、少しではあるが自分たちのできる範囲のことをやっていただけの状況が見られるようになりました。しかし、支援活動を行う期間が約一週間とあまりにも短く最後までお手伝いすることができませんでした。

その後神奈川県内の他市職員が支援のためこの避難所に入り、活動を行ったが数週間後には、元の状況に戻ってしまったと聞きました。



支援物資集積状況



配給物資準備状況

災害時相互応援協定のあり方について



避難所の状況

今まで、本市は4市協定という協定に基づき応援態勢をとってきました。しかしこれらの協定都市の全ては、関東圏にあり協定都市の全てが被災を受けました。

その中で、本市は唯一これといった被災を受けずに済みましたが、今後の体制としてもっと遠くの都市や今回被災地支援に入った石巻市などの遠方の都市と協定を結ぶ必要があると感じました。

食糧配給の難しさ

私の派遣先であった避難所では、周辺に自宅避難をしている住民の方が食糧受給しにきており、避難所で生活する方とのトラブルが度々ありました。

石巻市は災害発生当初から避難所の住民に対し、食糧の配給を行っていたが自宅避難を行っている住民に対しては、配給を行わない方針をとっており周辺の方々は、その時その時にボランティアが支援する焚き出しで何とか生活をしている状況でした。

私が避難所運営支援に着任した日に周辺の方から相談を受けその方たちにも配給し始めましたが、その後人から人に情報が流れ数日後には、数多くの方が配給を受けに来ることとなり、トラブルの原因となりました。

同じ学校に支援活動に着任した本市職員にその後の状況を聞いたところ、最終的には配給を求める方が200人を超えていたとの事でありました。石巻市はトラブル防止のため配給カードを発行し、配給を続けましたが、その対応はかなり難しかったようです。



避難所の受付・情報コーナー



派遣先近隣避難所

派遣を振り返って 今回の支援活動では、神奈川県内の各市町職員が活動を行ったが、今後このような災害が発生した場合やはり支援活動の方法など大幅に変更する必要があると感じます。具体的には、今回の県単位の支援体制を固定化し、例であれば緊急消防援助隊の応援態勢のようなブロック式を設け第1応援県か〇県第2応援は、〇県などを決めて活動する必要があると感じます。

なお、今回の災害では、被災した各市町村の行政自治が成り立っていないような状況下を考えると国がもっと介入し一旦は、国の指揮下のもと復興活動を実施する必要があると感じました。



下水道河川部 下水道河川総務課

主事 掛川 幸宏

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

5月9日、石巻市到着



津波で横転した案内標識

石巻市内に到着後、バスはがれきの山を縫うようにして石巻市役所を目指しました。

灯り少なく薄暗い街。路肩などには流された無人の車が放置され、あたり一面に立ち籠める腐敗臭が鼻をつきます。

「石巻市は水産業が栄える海辺のまち」そう事前に得ていた情報とあまりにも異なる様に接し、「被災地に来たんだ」という実感が一層高まりました。

津波被害 「想像していなかった」

避難者や地元住民の方が口々におっしゃっていたのは、「ここまで津波が押し寄せるなど想像していなかった」という言葉です。

「道路側溝から海水があふれ始め、数分後には胸まで海水が浸かっていた。身動きがとれなくなりながらもまま漂流した後、たまたま助かることができました。まさか津波がここまで来るなんて頭になかった。

（津波が迫る）自宅に戻った人もたくさんいるはず」と、ある避難者の方から伺いました。

津波の恐ろしさに加え、その到来を想定していなかったことが被害の拡大を招く要因となってしまったことが残念でなりません。



ポール看板上部まで津波が到達している

臨時職員が支える

当時、各避難所には石巻市の緊急雇用創出事業で雇用された臨時職員が配置され、釜小学校では3人が勤務していました。彼らはみな被災しており発災時には壮絶な経験をしています。津波によって家が流されたため避難所などで生活を送りながらも、臨時職員として懸命に働いていました。

また、避難者の方にとって同じ被災者であり住民である彼らが働いていることは心強く、時として細やかな気配りや対応は派遣職員にはでき難いものでした。



一緒に働いた臨時職員のみなさん

避難所の食事情

避難所の朝食・昼食は石巻市より配給されるパンやおにぎりが中心で、夕食は自衛隊による炊き出しによって温かい食事が提供されていました。朝食・昼食は栄養バランスが悪く種類も豊富とは言えないため、特に高齢の方にとっては辛い食生活と言わざるを得ない状況



自衛隊による夕食

でした。一方で自衛隊が届ける夕食は日替わりメニューで栄養バランスも良いため、先の見えない避難所生活を過ごされている方々にとって1日のうちこの時間を何よりの楽しみとされていました。

しかしながら、自衛隊より避難所に届けられる食事の配給が避難所の周辺住民も対象としているのか否かを巡ってトラブルになることもありました。

派遣を振り返って

活動当初、私は「自分自身が被災者や被災地のために直接役に立ちたい」とばかり考えていました。しかしその考えは次第に「復旧・復興を担う人たちを支えたい」という気持ちに変化していきます。現地での活動を通して、復旧・復興は本来的に彼ら住民にしかできず、またそうあるべきだと実感するに至ったからです。

本市でも起こりうる自然災害等の有事において、我々はその場で「どう対応するか」だけでなく「これまでどのように対応してきたのか」、その過程が問われる場にもなると思います。日々、あらゆる事態を想定して備えること。それは他ならぬ、茅ヶ崎市に携わる人々全てが担うべき街づくりの一環ではないでしょうか。



市民安全部 防災対策課

主査 松本 浩明

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

毎朝のミーティングと夜のミーティング

毎朝、避難所の各班の代表者の方々とミーティングをして、石巻市役所からの情報を伝え、避難者からの要望や生活状況を確認し、情報交換をしながら交流を深めました。

夜は、被災地支援に来ているスタッフと「今日の振り返りと明日の活動内容」について意見交換をしていました。



避難所の体育館の様子



津波で浸水し、動かなくなった車両（学校敷地内）

ごみ置き場の整理整頓

避難所に到着した時は、ごみが分別されてなく、バラバラに捨てられていて、段ボールも無造作に山積みされている状況でした。ごみ置き場を整理する時、最初は避難者の方は嫌がっていたのですが、途中から一緒になって片付けをしてくれて、ごみを捨てる場所の分別をしました。手伝ってくれたみなさん、ありがとうございました。



山積みの段ボール（ごみ置き場）



整理整頓をした後のごみ置き場

食事の配給

避難者の朝食と昼食は、毎朝トラックで配達されるパンやおにぎりで、夕食は自衛隊の炊き出しでした。炊き出しの時には、近隣の住民にも配るのですが、近隣の住民が毎日増えていたので、配る食事の数に苦勞をしました。

また、石巻市役所の給食場が津波被害にあったため、学校の生徒の給食がパン1つと牛乳しかありませんでした。そこで、支援物資のチーズやソーセージなどを給食に追加したところ、子どもたちはとても喜んでいたのですが、避難者の食事より圧倒的に少ない量を目のあたりにして、複雑な気持ちになりました。



ここでパンやおにぎりを配布しました



救援物資の倉庫

屋台のボランティア

週末、学校に屋台（やきそば屋）のボランティアがきたので、避難者や近隣の住民に声をかけたところ、多くの人が集まりました。

屋台のスタッフがとても生き生きとしていたのが、印象的でした。



ボランティアの屋台（やきそばの屋台）

派遣を振り返って

被災地に行き、少しでも被災者の助けになればと思い、現地に入りました。避難所の学校の先生から、震災当日は津波により校舎の1階や体育館は浸水し、生徒を校舎の上の階へ避難させたと聞きました。

避難者のほとんどは、体育館で生活をしています。その中には小さな子どもやお年寄りがおり、再度、津波が襲ってきたとき、避難者をどのように迅速に避難させたらよいかを常に考えながら、学校の教室に宿泊し、支援活動を行っていました。

石巻市内の各避難所は、地域のリーダーがしっかりとまとめている場所、バラバラの場所など様々な避難所があったと聞きました。神奈川県で大地震が発生したとき、茅ヶ崎市内の避難所でも同じようなことが予想されます。茅ヶ崎市でも訓練や研修などで、自助共助の大切さを広めています。今回改めて、地域の「自助」、「近所」、「共助」そして何より「絆」の大切さを実感した8日間でした。



企画部 広域事業政策課

主事 伊藤 慎佑

【派遣先】

石巻市立 蛇田中学校

避難者が求めていること



中学校の校庭に乗り入れる自衛隊の車両



郵便物は旧住所記載で避難所に届きます



体育館（避難所）の全体の様子



支援物資が積まれた倉庫

避難者が行政職員に求めていることとして強く感じたことは、情報が欲しいということでした。市職員に対しての不満の多くが、行政側の声が聞きたいというものでした。例え「現段階ではわかりません」という回答でも良いので声を聞きたいという意見もありました。市役所の職員が避難所に顔を出す際は、避難者とのコミュニケーションを取ることが、とても大切であると感じました。先行きが不透明な避難所生活を強いられている避難者から、行政に対して不満が出ることは当たり前のことだと思うので、少しでもその不満を受け止め、できることから解消していくことも支援のひとつではないかと感じました。

共同生活を送るための工夫

私が支援を行った避難所では、避難者が主体的に避難所運営に携わっていました。長期の共同生活を送るうえで、避難者同士のコミュニケーションが大切であると考え、あえて生活空間を仕切るパーテーション等は設置されていませんでした。また、避難所には多くの子供が生活してこともあり、避難者が実費で景品を用意し、毎晩ビンゴ大会が開かれるなど、避難所の運営方法などを避難者同士で改善していく、共助の意識が浸透していました。



毎晩開かれていたビンゴ大会の様子

避難者（生還者）から学んだこと



スーパーの入口に貼られたポスター

私が支援を行った避難所では、避難者の多くが津波を経験していました。震災当日の話を聞くと、車で帰宅している最中に津波に襲われ、運良く建物に車がひっかかり助かったという方もいれば、震災当日は雪が降っており寒かったため、波をかぶった状態で屋上に避難している人のなかには、寒さで命を落とす人もいたそうです。そこで、みなさんが一様に言っていたことは、他人でも良いので誰かと一緒にいたかったということでした。災害時には精神面も含め、周りの人たちと協力することの大切さを改めて感じました。

派遣を振り返って

避難所の運営については、入れ替わりの多い行政職員ではなく避難者が主体となるのが望ましいと感じました。そして、行政職員はその仕組みを作ることが大切だと感じました。避難者の方から、震災後2、3日で最低限の衣類・食料・寝床の確保はできていたと聞きました。そして、震災から2ヶ月後には、余るほどの食料が毎日集まる状況でした。同規模の災害が起きた際、日本同様に被災者を保護できる国はそう多くはないのではと感じました。しかし、それ以上に多くの課題がみえてきたことから、今回の震災で見つかった課題について、市民の立場、行政職員の立場の双方から、自分のまちと照らし合わせ対策を検討しなければいけないと感じました。



市民安全部 防災対策課

主任 吉井 裕哉

【派遣先】

石巻市立 大街道小学校

住民主体の避難所運営

当初自分が思っていた甚大な被害を受けた地域の避難所のイメージは、精神的に追い込まれている方が多数避難している関係で運営方法に統一性がなく、無茶苦茶でも不思議ではないというものでした。しかし、実際大街道小学校へ着くと、避難所の運営は安定しており、しかも地域の住民が主体となって運営されていました。

将来に不安を抱いて自分のことで精一杯の方が多いい中での共助の姿勢は見習うべき点が多かったです。



避難所小学校の体育館内の様子



地域住民主体となった運営

周辺的环境は非日常

大街道小学校の立地場所について、石巻工業港から程近い場所にあり（海岸線から1km弱）、周辺の家屋のほとんどが全壊若しくは半壊状態でした。また、津波に巻き込まれて避難している方も少なくなかったことから、津波の被害が大きかったことが伺えました。その他に強いへドロ臭や埃の影響でマスク無しでの外出ができないことや、街の風景1つ1つが非日常的な光景でした。



津波の爪痕が残る



がれきや土砂を寄せて通行路を確保



がれきや土砂の撤去がまだ行われていない所も

思った以上に充実した食事

体育館脇で自衛隊隊員が毎日炊き出しを実施していたこともあり、食事に困ることはありませんでした。その内容は、朝は総菜パンと菓子パン、昼食・夕食は自衛隊が調理したものを食べていました。昼食・夕食の献立は栄養バランスがしっかりしており充実していました。



自衛隊員による炊き出し



壁に貼られた1週間の献立



栄養バランスの考えられたメニュー

避難者の気分転換を決行！

避難所運営について見習うべき点が多かったことを上述しましたが、老若男女様々な生き方、考え方を持った方が避難していることもあって、時には衝突することもありました。

そこで、私と共に避難所運営支援業務に携わっていた職員の提案で、避難者及び避難所運営支援業務に従事した職員によるレクリエーションを実施しました。

内容はビンゴゲームやダンス等を行い、会場全体が一体となって盛り上がりました。中には、涙を流して喜んでいた方もいて、本当に実施して良かったと思いました。



レクリエーションの様子

派遣を振り返って

私が支援活動に携わった時期は、震災が起きてから二ヶ月余り経過していたこともあり、避難所の運営は安定しており、見習うべき点も多くありました。しかし、避難している大半の方は今後の生活の見通しが立っておらず、日々不安を抱えながら生活をしている側面もあったことから、慎重な対応も求められました。

また、行政と避難者間の連携が不十分であったこともあり、被災した方の負担は想像し難い程重かったと思われます。このような状況において避難者と一体となって取り組み、かつ成功したレクリエーションは一番の思い出です。この経験を現在の仕事に生かし、災害に強いまちづくりを進めていきたいです。



企画部 秘書広報課

主任 小見 雅彦

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

台風とともに北上、ずぶ濡れで釜小学校へ

台風による大雨と強風の中、派遣先の石巻市を目指しました。途中のJR仙台駅では、天井から滝のように雨漏りが発生していました。

派遣先に到着すると、ずぶ濡れになりながら学校近くの国道から校内まで走りました。その道の片側のブロック塀とビニールハウスが地震と津波の影響で壊れてしまっていたことが今でも強く印象に残っています。また、避難所となっていた体育館は天気の影響もあってか、気温が低くとても寒かったためストーブを焚いて避難者のみなさんは暖をとっていました。



JR仙台駅の様子



大地震の影響で倒壊したブロック塀

児童の様子で状況を再認識

釜小学校の児童は、みんな元気いっぱいです。いつも校庭で鉄棒をしたり、鬼ごっこをしたりとても楽しそうです。その元気な声に自分も力をもらっていました。

釜小学校は、体育館を避難所として利用しているため体育の授業も校庭で実施していました。ふと気付くと児童はみんな体操服ではなく普段着でした。「確かにこの状況では着替えなんてできないよな」と思っていると、授業をしている校庭に自衛隊の大きなトラックが入ってきたりして、改めてこの小学校が置かれている状況を再認識しました。

また、校長先生とお話する機会があり、釜小学校では大震災の影響で150人も児童が減ってしまったそうです。震災前はもっともっとこの学校には児童の元気な声が響いていたんだなと思い、少しでも早く元気を取り戻して欲しいとただただ願うばかりでした。



避難所となっている釜小学校体育館



校庭には自衛隊のトラックが

混乱を招いてしまった物資配給カード

物資が大量に届いてしまうトラブルも

派遣期間中の6月1日から避難所以外の住民を対象にした物資配給カードが導入されました。しかし、住民への周知不足と配給を受けることができる要件などが曖昧で、現場は少し混乱していました。また、避難所にいる住民以外には物資の配給をすべて断っていた避難所が近隣にあったため、釜小学校に物資の配給を受けに来る外部の方が日に日に増加しました。物資が足りなくなる状況は発生しませんでした。配給カードの申請が始まったことによる市と避難所の連絡体制がうまく機能せず、物資がさばききれないほど届いてしまうトラブルもありました。どうしてもさばききれなかったおにぎりなどの賞味期限の短いものは、衛生面を考慮して泣く泣く廃棄しなければならない状況でした。

この物資配給カードの対応や今後の避難所運営をスムーズにするため、神奈川県隊で近隣の避難所をできるだけ多く訪問し、各避難所の職員から聞き取りを行い、釜小学校の臨時職員とミーティングを行い、今後の避難所運営の方向性を議論しました。

派遣を振り返って

派遣期間の一週間はとても短く感じました。しかし、この短い期間でも大災害における避難所運営や避難者とのコミュニケーション、行政運営の難しさを最前線で、肌で感じました。自治体と避難所の連絡体制の強化はもちろんですが、近隣の避難所とのコミュニケーションもとても大切なのではないかと感じました。避難所にいる人の構成によって必要となる物資も異なるし、使わない物資は別の避難所へ渡すことができれば、もう少しスムーズな避難所運営ができるのではないかと思います。事前のルールづくりがとても大切だと思いました。

また、私が派遣された時期は梅雨の時期でこれから夏場を迎えるにあたり衛生面の心配がありました。避難所生活が長期化することも踏まえ、暑さ、寒さへの対策が必要だと思います。



総務部 職員課

主事 稲岡 嵩之

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

毎朝のリーダー会議



リーダー会議開催場所

毎朝8時から臨時職員、教職員、避難者の各班のリーダー会議を行いました。会議では、午後から学校敷地の消毒作業など行うというように一日の流れを確認した後、避難所で起こっている問題があれば意見交換を行いました。例えば、夕飯の時間に洗濯をした人がいて、蛇口が少ないために食器を洗うことができないという状況がありました。その日は、水道が大変混雑しており、私も不思議に感じていましたが、理由が翌日の会議でわかりました。その結果、夕飯時の洗濯は全員合意のうえで禁止になりました。

仮設トイレの使用減少

水道が使用できるようになっていたため、避難所である体育館のトイレが利用される機会が多くなっていました。仮設トイレは、体育館のトイレが満室であった時に利用されるという状況でした。

しかし、震災当初は頻繁に利用されていたということを知り、平常時にバキュームカーを使用することがある石巻市はいいが、使用することが少ない本市の場合は上手く機能するだろうかと疑問に思いました。

臨時職員も被災者

写真は、自衛隊に対し、支援物資の必要数を伝えている場面で左が臨時職員です。男性2人（写真中の1人は未成年）、女性1人の計3人が交代で避難所受付業務や食糧配給の管理などを行っていました。3人とも地元の方で、避難者とは友人のように仲良く話しており、お互いに気兼ねしていないことが伝わってきました。

しかし、明るく避難者と接している一方で、家が被災しており、自宅がなくなってしまって別の避難所から出勤していると聞いたときは心が痛みました。



自衛隊に救援物資の要望書を渡しているところ

2階のみ残る建物

石巻市内では、建物の1階部分が流され、柱だけで2階部分が残っている民家が多く見られました。臨時職員の方も自宅の1階にいて急いで2階に駆け上がったために命拾いしたと話してくれました。当たり前のことなのですが、津波の危険がある場合は時間がなければとにかく家の高い場所に逃げる、また1階で就寝しないなどの心がけが生死を分けることを肌で感じました。

派遣を振り返って

学校が避難所となった場合にどの場所をどのような用途で利用できるのか、できるだけ細かく取り決めを作っておくことが必要不可欠であると感じました。例えば釜小學校で良かった点は、家庭科室を食糧の倉庫としていたことです。机がたくさんあり、スペースが広いことから食糧の区分けがしやすかったです。

配備職員として、救援物資の保管場所、医療関係のボランティアの活動場所など、地域住民、学校関係者の方々と協議し、避難する場所だけでなくもう一步踏み込んで決めていきたいです。実際に被災した時の変更はやむを得ないので、大枠だけ決めておくだけでも避難所運営を円滑に進めることができると考えました。



市民安全部 防災対策課

主事 佐々田 享洋

【派遣先】

石巻市立 湊小学校

教室が生活スペース

湊小学校では2階から4階の各教室を生活スペースとして使っていました。その中で少しでも顔見知りの方が一緒に生活しやすいと考え、地域毎に部屋割りをしました。しかし、設備はテレビがある部屋、ストーブがある部屋等様々でした。

避難者にお話を伺うと、震災当初は1,000人以上の人が着の身着のまま避難してきてどの教室もいっぱいだったそうです。ほぼ3日間飲まず食わずの状態、お互いに身を寄せ合いながら寒さをしのいだそうです。



避難所となった教室の様子

湊地区合同慰霊祭

震災からちょうど3ヶ月が経過した6月11日、体育館で湊地区合同慰霊祭が行われました。避難所の子どもたちが作ったロウソクで「6.11湊小 絆 アリガトウ」と火を灯し、多くの方が目に涙を浮かべながら参加していました。その中でも、赤ちゃんがおばあちゃんに抱かれたまま、恐らく覚えてたの言葉で何度も「ママ、ママ」と手をたたきながら、祭壇の方に呼びかけているのに対し、おばあちゃんが「ママが会いにきたよ」と声をかけていたその風景がすごく印象的で、私自身、涙をこらえていました。



体育館で行われた慰霊祭



参加者がロウソクにひとつひとつ火を灯す

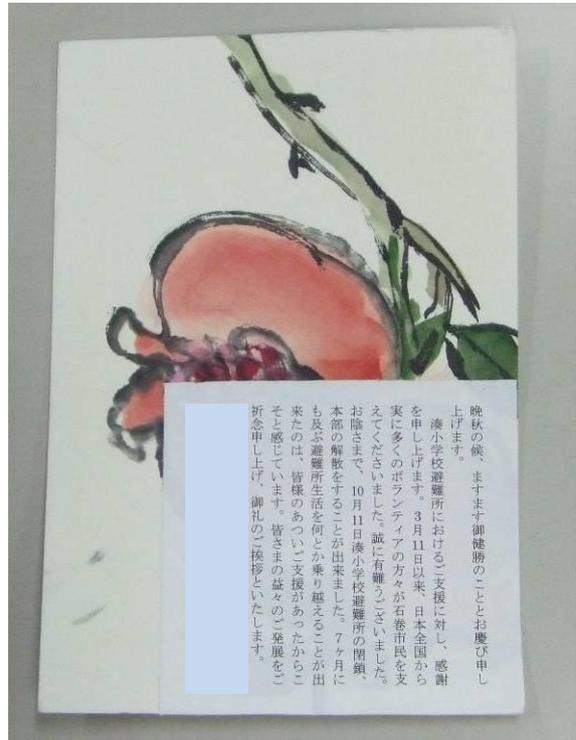


点火されたロウソクによる「アリガトウ」の文字。

派遣から半年後に届いた 1 通の手紙

私が派遣されてから約半年後、避難所が閉鎖された旨の報告とお礼のお手紙をいただきました。短い時間の中で、わずかな力にしかなれなかった。いや、力になれたかもわからないのに、感謝のお言葉をいただき、湊小学校で出会った方々の温かさが本当に嬉しかったです。人と人とのつながり、「絆」というのは、何よりも一番の防災対策になるのではないかと改めて強く感じました。

湊小学校避難所本部から届いた手紙



派遣を振り返って

1 週間という短い時間ではありましたが、湊小学校の避難所で過ごした時間は、自治体の職員としても、またひとりの人間としてもとても貴重な経験だったと感じています。被災され、避難された多くの方々と触れ合い、自然災害の恐ろしさ、人の温もりや優しさ、助け合いの心、地域のつながりの強さ、人の弱さや強さ等、数え切れないくらい多くの事を学んだ時間でした。これからは、自分が見てきたもの、耳にしたもの、感じたもの、経験したことを少しでも多くの人に伝えていけるように、茅ヶ崎市の防災対策に生かしていきたいと考えています。



総務部 文書法務課

主任 石井 祐司

【派遣先】

石巻市立 湊小学校

避難住民と近隣住民

避難所の運営は、主に避難住民と近隣住民の一部の方により構成された運営本部、ボランティア団体、行政団体によりなされていました。したがって、多くの避難住民は避難所の運営に携わる機会が少ない状況にありました。そして、自衛隊による支援（食事の配食等）が徐々に取り止められている状況にあり、避難所の運営について見直しをする必要がありました。

そこで、私は、日頃から避難住民、近隣住民と積極的にコミュニケーションをとり、避難所の運営に参加するよう呼びかけることによって、避難住民と近隣住民が避難所の運営（配食等）に参加するよう努めました。



憩いの場



お茶っこ



ボランティア団体のレンタサイクル



ボランティア団体のキッチン



泥かきボランティア団体の拠点



配食の様子



避難者の方とボランティアさん

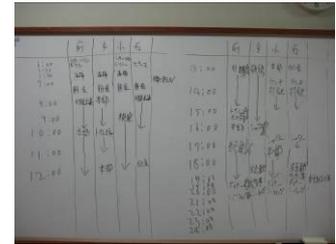


避難されている方と配食

運営本部とボランティア団体

避難所には6つのボランティア団体及び複数の個人ボランティアが常駐し、運営本部とボランティア団体における役割分担の上、各々が独立した活動により避難住民を支援していました。

運営本部とボランティア団体等がさらに連携をとれる余地があると思えたことから、私は、日頃からボランティア団体と積極的にコミュニケーションをとり、避難所の運営業務及びボランティア活動の情報の共有を図るとともに、避難所の運営（配食等）にボランティア団体からの協力が得られるよう努めました。また、運営本部及びボランティア団体の求めに応じて、避難所の運営及びボランティア活動について助言をすることもありました。



支援職員の役割分担



鳥取県職員&ボランティアと

石巻市と避難住民との橋渡し



運営本部で情報提供



電話コーナー

当然のことながら、石巻市の職員も被災者であることから、石巻市から避難住民への情報提供等が不十分な状況にありました。特に仮設住宅への入居申込みへの対応が不十分な状況にありました。

そこで、私は、石巻市の職員から情報提供等がある際は、詳細な聞き取りをし、必要があれば石巻市に直接問い合わせることにより、情報提供が円滑に進むよう努めました。

また、仮設住宅への入居の申込みについては、運営本部の求めに応じ、避難住民の申込み状況を調査し、申込みを取りまとめるとともに、石巻市の担当課と申込みの手続等について調整をし、手続が円滑に進むよう支援しました。

派遣を振り返って

石巻市の行政機能が完全に回復していないことから、上述のとおり情報提供等の行政機能が不十分でした。石巻市も臨時職員の雇用等により連絡調整員等の補充をしておりましたが、行政実務については不慣れであったことから、かなり苦勞しているように見受けられました。そのような状況において、避難所の運営において行政職員たる私がいた一番のメリットは、石巻市と避難所との連絡調整等をコーディネートした点にあると考えます。この経験から、避難所の運営が安定した後において支援自治体が効果的な支援を提供できる役割は、石巻市と避難所の連絡調整及び石巻市の行政機能の補完だと考えます。



企画部 施設再編整備課

課長補佐 青木 聡

【派遣先】

石巻市立 万石浦中学校

避難所運営の難しさ

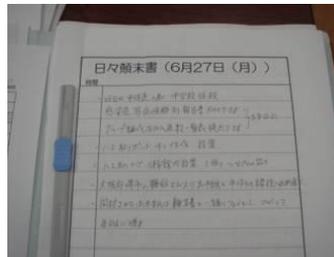
避難所における日常業務は、震災時当初より派遣された職員らによる積み重ねによって、マニュアルが作成されていました。そのマニュアルにより運営していきませんが、避難所への支援活動は、避難所の被災者数、ライフラインの状況、食料の配給状況など、時間とともに変わっていきます。それらを相対的に検討し、その状況に応じた運営方法を見直していくことの難しさは、実際に携わらなければ分からなかったと思います。



避難所である石巻市立万石浦中学校



今日のイベントやスケジュール



毎日作成する状況報告書



事務所の状況

被災者の思い

ライフラインは復旧しており、日常生活に困難な状況でないにもかかわらず、避難所生活を快適に過ごせる状態に慣れてしまっている被災者に対して、自立意識を持つ被災者からは不満の声が聞きました。お互いの様々な思いを受けながら感じたことは、いつまでも被災者として扱われ、自立の機会を奪ってしまうこととなってしまうため、時間と共に変わりゆく



避難者の体育館での配置図



被災者の応援メッセージ

被災者の現状把握が必要となるのではないかと思います。

派遣職員としての役割とは

派遣職員2人と臨時職員3人で運営にあたりました。臨時職員自らも被災者であり、震災が起こる前までは、それぞれが仕事を持っているため、行政職員としての役割を果たすことが難しく、また被災者という側面を持っているため、避難所の被災者に対して、きっちりとサポートしていくことが難しい場面も見られました。したがって、行政職員の経験を生かした中で、派遣職員としてしっかりと調整役を果たしていくことの必要性を感じました。



臨時職員さんと共に・・・



班長会議の様子



派遣職員が寝泊まりした男子更衣室

小学生とのふれあい

避難所運営支援の仕事以外に、今回は茅ヶ崎小学校ふれあいプラザの小学生が作成した「震災折り紙メッセージ」を、避難所に届けるという大役を引き受けることとなりました。小学生が心を込めて、被災者を励ますメッセージを、現地の状況が分からない中で、どうすれば届けることができるのか不安でした。笑顔で受け取る避難所の子どもたちを見て、そんなことは取り越し苦労だったと思いました。まさに「絆」を感じた瞬間でした！



茅ヶ崎小学校より～メッセージをパス



みんなで広げて撮影



大学生が貼ってくれました

派遣を振り返って

倒壊した建物などの被害状況を目の当たりにし、津波の恐ろしさを「見たこと」、当日は卒業式だったため、正装したままでみんな食べるものがなく、「市場から流れてきた魚をたき火で焼いて食べた」ということを「聞いたこと」、炊き出し、自転車修理、演奏会など次から次へと支援したいとボランティアから申し出があり、行政に行き届かない心の支援活動のありがたさを「感じたこと」、それらすべて映像や新聞を通してとは違う、現状を「見て・聞いて・感じる」貴重な体験を得ました。

単なるボランティアとは違い、職務として被災地の状況を経験することで、災害時における「避難所運営のあり方」を検討する材料となりました。予め想定できる「避難所運営プログラム」は必要であり、効果的な避難所の運営ができるように、今回の経験を生かしていくことこそが、派遣された我々に与えられた新たな使命だと・・・みんな感じたことではないかと思います。また、日本全国より様々な自治体から職員の支援がなければ、行政運営も満足に行うことも難しく、その支援体制も、予め検討する必要性を感じました。